書　　評

石　南国著『韓国の人口増加の分析』

勁草書房，東京，1972年，351＋xxviページ

著者による韓国の人口増加についての研究発表にはじめて接したのは，本書の出版から10年ほど前の日本人口学会の年次大会の時であったと思う．それ以来，氏は韓国人口の研究成果を同学会の年次大会で次々に報告され，また雑誌論文に発表を積み重ねられた．そしていつしか歴史的な深みと人口学的分析の精緻さとを兼ねそなえた体系的な韓国人口増加の研究を展開して行かれた．人口増加の研究は人口研究の根本的課題であり，韓国を対象にこの課題にしっかりと焦点をすえて，一途に研究の深みへと研鑽される氏の情熱に評者は日頃絶大な尊敬の念を禁じ得なかったが，今回その研究の全貌が一巻にまとめられたことは，日本の人口学徒にとって誠に慶賀すべきことと信ずる．

本書は，第1章　韓国人口に関する統計資料，第2章　韓国の人口増加と特質，第3章　センサス以前の人口推計—1950～1925年—，第4章　韓国の死亡力分析，第5章　生命表の作成と推定，第6章　韓国の出生力分析，第7章　年次別出生数および出生率推計—1906～1944年—，第8章　韓国人口の増加予測と構造変動の諸章から成り，巻末付表として著者作成の韓国モデル生命表が掲載されている．これら諸章の表題からもうかがえるように，本書は韓国の人口増加現象についてのすぐれて人口学的な分析を堅実な体系にまとめ上げたところに特色があるといえよう．

この分野の研究にとって重要な仕事は，人口統計を生み出す統計制度と統計作成手続きについての吟味，人口統計データの評価と補正，統計欠如期間に対する補間推計，人口動態・年齢構造・人口増加相互間のダイナミックスの分析であるが，本書は内外の既往研究の検討と活用に著者独自の人口分析を加えて，これらの諸点をくまなく扱っている．

第1章の紀元前にさかのぼる時代から李朝時代に至る歴史人口学的史料，ならびにそれ以後現代までの近代的人口統計資料についての精密な紹介は興味深く教えられるところが多い．第2章と第3章とでは，李朝時代および1925年初回国勢調査に至るまでの人口増加の特質の形式人口学的分析と推計が試みられており，公表統計の必ずしも信頼できぬ状況のもとでの統計空白期間に対する補間推計には著者の苦心のあとがにじみでている．第4章の死亡の分析は精緻を極め，第5章のモデル生命表の作成は，これが他章における人口推計と人口分析の重要な手段を提供するという意味で特にその手続きを慎重に論述していて，この章は第7章の出生数・出生率の推計とともに本書の中枢をなしていると思われる．

本書は静態統計よりもむしろ動態統計の分析に重点をおいている．この点に別に異論を唱えるものではないが，例えばセンサスの男女年齢別人口およびセンサス生残率についての吟味と評価は，逆進生存率法による推計の根拠にもつながる問題として，もう少し詳細に論ぜられたらよかったかと思う．また年齢別人口の補間推計における Water 氏法採用の妥当性についても一言していただきたかった．モデル生命表の作成は著者の最も苦心されたものの一つと思われる．日本の場合と異り，既存生命表の数が少く，そのため著者による補間生命表をも含めて，それに基づいたモデル生命表をつくられているが，この推計補間生命表をもモデルの素材としてよいかどうかには問題が残ろう．また Coale-Demeny モデル生命表作成法との比較があればなお興味があったと思われる．

以上若干のコメントをならべたが，本書は日本の人口学界における近来にない名著であり，巻末に英文要約が付されてはいるが，英語への全訳によつて国際的に広く参考されるべき労作であると信ずる．

（小林　和正）